

あさ か とし ひこ 朝 賀 俊 彦

学位の種類	博士(文学)
学位記番号	文博第 396 号
学位授与年月日	平成24年 3月27日
学位授与の要件	学位規則第 4 条第 1 項該当
研究科・専攻	東北大学大学院文学研究科 (博士課程後期 3 年の課程) 文化科学専攻
学位論文題目	CONSTRUCTIONAL DENOMINALIZATION
論文審査委員	(主査) 教授 金子 義明 教授 大河内 昌 准教授 島 越 郎

論文内容の要旨

1. 目次

Chapter 1: Introduction (序論)

Chapter 2: The Adjectival Noun Construction (形容詞的名詞構文)

Chapter 3: The Pseudo-Partitive Construction (擬似部分構造)

Chapter 4: Denominalizing Constructions (脱名詞化構文)

Chapter 5: Concluding Remarks (結語)

2. 全体要旨

本研究は、形容詞的名詞構文と擬似部分構造において統語形式と意味が対応しない現象の分析を通じて、言語分析における統語論と意味論の役割について考察する。広義の生成文法研究に位置づけられる文法の並列モデルの枠組みの下で、両構文に対して語彙認可に基づく分析を提案し、その基本的特性を、意味の問題または統語と意味のインターフェースの問題として捉えることの妥当性を論ずる。また、精緻化された意味理論に基づき、両構文に共通して見られる脱名詞化の現象が指示性の喪失により引き起こされることを主張する。

さらに、独立した文法概念としての構文を認める見解に立ち、これらの構文およびその変異形は、脱名詞化の特性を共有する一方で、相互に異なる統語的・意味的個別特性を示し、総体としてクラインを形成することを論じ、言語の共時的変異および通時的变化に見られる段階性を、関連する構文が形成するネットワークとして捉える可能性を提示する。本研究は、構文を独立した文法概念として認める見解、および統語論の簡素化の仮説に従う形で、意味理論および統語と意味のインターフェース理論の精緻化

により、言語分析における統語論の役割が縮減されることを示す。

3. 各章の梗概

Chapter 1: Introduction (序論)

第1章では、本研究における問題設定を行い、第2章以降で展開される議論の理論的前提となる諸概念を導入する。

言語は、統語の仲介により、音声の持つ線条性と意味の階層性との間に写像関係を結ぶシステムとみなすことが可能である。統語形式と意味との間の階層性の対応関係は、無標の事例においては保持されるが、必ずしも両者の階層性が保持されない言語事象が存在する。言語研究の課題の一つは、そのような階層性の非対応現象に対して説明を与えることである。このような非対応現象の具体的事象として、以下の形容詞的名詞構文に見られる主要部・非主要部の衝突がある。

(1) an angel of a girl, a jewel of an island

本研究では、同構文および関連構文の分析を通じて、Jackendoff (1990) において定式化された意味に関わる次の二つの問題について考察する。

- (2) 意味の理論が扱うべき現象を明らかにし、意味的直感の形式化を行うこと (意味の問題)
- (3) 形式化された意味と統語構造との関係を明らかにすること (対応の問題)

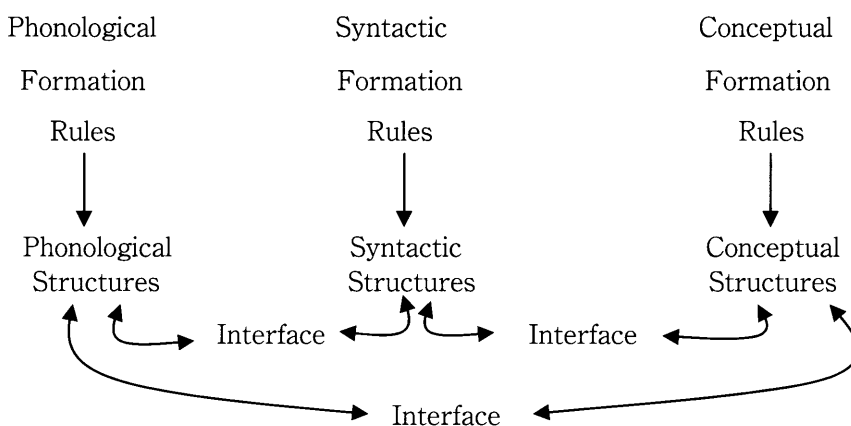
これらの問題に対する取り組みは、その帰結として言語分析における統語論の役割を再検証することにつながる。この意味において、本研究は統語研究としての側面を持つ。統語研究の指針としては Culicover and Jackendoff (2005) で提唱されている (4) の統語論の簡素化の仮説を採用する。

(4) 最も説明力のある統語理論は、音声と意味を仲介する際に必要最小限の構造を仮定する

次いで、次章以降の議論に関わる諸概念を理論的前提として導入する。

まず、本研究では、音韻部門、統語部門、意味部門はいずれも自律的生成機構であり、それぞれの部門で形成される音韻構造、統語構造、概念構造の関係は派生関係ではなく、対応規則により結びつけられる対応関係であるとする (5) の並列モデル (parallel architecture) の枠組みを採用して論を進める (Culicover (1999, 2009), Jackendoff (1990, 1997a, 2002, 2010, 2011, Culicover and Jackendoff (2005))). このモデルは、精神の諸部門は、それぞれに固有の構成要素および連結規則により相互に異質な表示を形成しているとする表示のモジュール性の仮説に基づいている。

(5) The Parallel Architecture



統語部門の表示は、統語範疇・統語素性の束を構成素として形成され二項性と内心性という基本的性質を有している統語構造により記述される。これに対して、意味部門の表示は、存在論的範疇を構成素として形成される意味関数構造の形式をとる概念構造に基づいて記述される。

並列モデルの特徴は、 X^0 レベルの要素、形態素および句表現を、同様に語彙項目として認め、規模の違いにかかわらず、これらすべてのレベルの語彙項目を対応規則と見なす点にある。特に句レベルの単位の扱いについては、構文を独立した文法概念として認める見解をとる。語彙項目は、語彙挿入の対象ではなく、それぞれの部門で形成される音韻構造、統語構造、意味構造の相互関係の合法性を語彙認可により照合する役割を果たし、総体としてのレキシコンは、インターフェース部門の一部として位置づけられる。

Chapter 2: The Adjectival Noun Construction (形容詞的名詞構文)

第2章では、形容詞的名詞構文に対して語彙認可に基づく分析を提案する。まず、主にアメリカ英語の例により、この構文の諸特性を概観し、次いで先行研究に批判的検討を加える。その後、語彙認可に基づく同構文の分析を提案し、この構文の諸特性が構文に固有の語彙特性として説明されることを論ずる。

(1) にあげた形容詞的名詞構文は、形式的には、(6) のような通常の主要部・補部からなる名詞句と同じ (7) の語連鎖を形成するが、通常の名詞句と異なる特徴を持つ。

(6) a review of the book, an article of the accident

(7) [D1 N1 [of D2 N2]]

具体的には、形容詞的名詞構文は、(8) の形容詞を含む名詞句に平行的な解釈を持ち、統語的主要部である N1 が意味的には修飾要素として機能しており、通常の名詞句で補部位置に生起する N2 が意味的主要部として機能している点で、主要部・非主要部の衝突を示すことがあげられる。

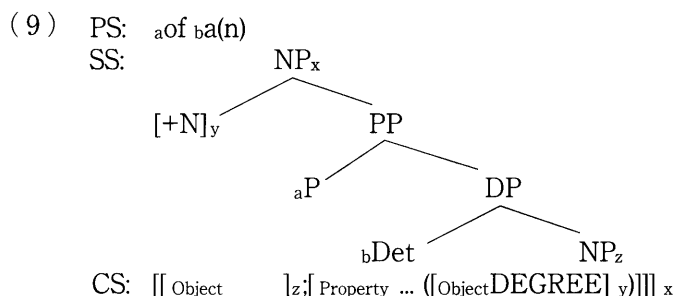
(8) an angelic girl, a jewel-like island

その他にも、N1 は本来的に名詞でありながら、比較表現を許容するなどの形容詞的特徴を示すこと、句の一部が統語操作の適用を受けない点で通常の名詞句とは異なる統語的緊密性を示すこと、さらに、N1 の選択には意味的制約が課され、総体としての構文は半生産性を示すこと、同一名詞句内で同構文

の繰り返しが可能であることといった特徴がこの構文には見られる。

同構文に対する先行研究としては、叙述理論に基づく分析 (Napoli (1989), den Dikken (2006))、述部移動、演算子移動などの移動に基づく分析 ((Bennis et al. (1998), den Dikken (1998), Kayne (1994), Matushansky (2002))、複合的修飾要素の形成に基づく分析 (Ike-uchi (1986, 1997-1999, 2003), Aarts (1998)) などの統語分析があげられるが、これらの分析を概観し、いずれの分析にも理論的問題または経験的問題があることを指摘する。

本論では、語彙認可に基づき、同構文を (9) に示した句レベルの語彙項目として扱う分析を提案する。



この分析では、主要部・非主要部の衝突は、構文として規定される統語 (SS) と意味 (CS) の対応関係 (下付き文字 y で示される) により、N1 の形容詞的性質は、その生起位置が名詞と形容詞に共通する [+N] という統語素性の語彙指定を受けていることにより、統語的緊密性は、句全体の統語構造が認可の単位として規定されることにより、それぞれ構文の語彙特性として説明される。また、N1 に課される意味選択および半生産性は、動詞の補部選択と同様に捉えられる。さらに、語彙認可は、原理的には適用条件が成立する限り適用可能であるため、繰り返しの可能性は語彙認可の帰結として説明される。

次いで、この構文が示す変異について共時的、通時的観点から考察を行う。まず、英語に観察される方言的変異の事例としてイギリス英語を取り上げる。イギリス英語でも、構文特性としての主要部の衝突は見られるが、N1 は、その形態特性や句表現としての生起可能性に関してアメリカ英語の場合とは異なり、通常の名詞として振る舞う。また、通時的にも N1 は本来の名詞特性を保持していることが観察される。

さらに、形容詞的名詞構文は、通言語的研究により、イタリア語、ポルトガル語、スペイン語、フランス語、オランダ語、スロベニア語、ハンガリー語、フィンランド語、日本語などの諸言語でも観察されることが明らかにされている。ここでは、イタリア語とオランダ語の事例を取り上げ、英語とこれらの言語との比較に基づく対照研究を行う。

イタリア語でも、構文特性としての主要部の衝突は英語の事例と共通している。しかしながら、N1 は、名詞としての本来の形態特性を保持しつつも、句表現として生起することはできず、アメリカ英語ともイギリス英語とも異なる性質を示す。構文を独立した語彙項目として認める分析のもとでは、このような言語間の変異は、英語の方言差とともに、(10) に示すような構文における N1 の統語特性の違いに還元される。

- (10) Feature Specification on N1
 American English [+N, -phrasal]

British English	[+N, -V, uphrasal]
Italian	[+N, -V, -phrasal]

この変異のあり方は、言語間の相違を同一の概念構造の統語的具現形式の差異として説明するパラメータに関する提案 (Culicover (1999)) を経験的に支持する。

オランダ語との対照では、D2の特性について考察する。オランダ語においては、アメリカ英語と同様に、D2が単数不定冠詞 *een* に限定されている。しかしながら、この構文ではN2に単数可算名詞以外の名詞句が生起可能であり ((11a))、通常の名詞句で義務的なD2とN2との間の一致 ((11b)) が見られないことから、D2は同構文ではその本来的機能を喪失し、構文の標識としてのみ機能していることが示される。

- (11) a. ?dat schandaal van een directeurssalarissen
 'that outrage of a managers' salaries'
 b. *Ik heb een boeken gelezen
 'I have a books read'

Chapter 3: The Pseudo-Partitive Construction (擬似部分構造)

第3章では、(12)の擬似部分構造を取り上げ、語彙認可分析がこの事例に対しても有効であることを論ずる。

- (12) a bunch of men, a glass of wine, a cup of sugar

擬似部分構造は、単一の統語要素であるN1の特性が、数量化、有界性の変更、修飾というタイプの異なる複数の意味現象に関与する点で、統語形式と意味の間に一对多の対応関係を示しており、形容詞的名詞構文とは異なる形で統語と意味の非対応現象を示す。

この構文は、その基本的特性として数量表現としての性質を有することが従来から指摘されている。また、N1に生起する名詞は、形容詞による修飾を許容するなどの点で、本来的な名詞としての性質を保持している一方で、主題役割付与における意味選択に参与しないなど通常の名詞とは異なる振る舞いを示す。

同構文に対する先行研究の概観では、N1を含む語連鎖が統語的に複合的数量詞を形成するとの分析 (Akmajian and Lehrer (1976))、統語構造上の位置関係により数量詞の特性を捉える分析 (Jackendoff (1977), Selkirk (1977))、二重構造分析 (Ike-uchi (1986))、叙述関係に基づく分析 (Abney (1987), Corver (1998)) を取り上げ、いずれについても句構造理論上の問題、または数量表現としての解釈が保証されないなどの問題があることを指摘する。

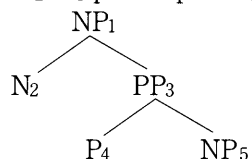
基本的に擬似部分構造の数量表現としての解釈を統語特性に還元するこれらの統語分析に対して、Guéron (1979) では、擬似部分構造は一般的な名詞句と同じ構造をしており、擬似部分構造の解釈は、構成素の意味特性の帰結として捉えられるとの分析を提案している。本研究では、Guéronのこの洞察に従い、同構文に対して語彙認可に基づく分析を提案する。

擬似部分構文では、N1は数量化の機能に加えて、離散的単位の形成および修飾の機能に関与している。本論では、(13)のように、統語レベル (SS) では単一の要素である *flock* の意味素性が、意味のレ

ベル (CS) では、下付き数字 2 が表す対応関係で示されるように、有界性素性 +b、数量詞 Q、修飾要素 Property の各意味特性 (の一部) として分配されるとの分析により、これら複数の意味機能への N1 の関与を説明する。また、N1 が形容詞により修飾されることは、統語レベルにおいて N1 が名詞であることにより説明され、意味選択に関与しないことは、意味レベルにおいて N1 が非主要部化されることにより説明される。

(13) PS: (a) flock₂ of₄ philosophers₅

SS:



CS: [Object +b₂, [Q ... FLOCK₂ ...]] = [PHILOSOPHERS₅; [Property FLOCK]₂]₁

解釈意味論の立場を取る統語分析では、数量詞は決定詞または主要部として、修飾要素は付加詞として分析され、それぞれの統語特性に基づき解釈される。しかしながらこのような解釈意味論の前提では、擬似部分構造で単一の統語的単位が数量詞のみならず修飾要素とも関連づけられることは捉えられない。このことは、擬似部分構造の特性を適切にとらえるためには、派生によらない分析が必要であることを示している。

擬似部分構文についても、英語以外の諸言語で、対応する表現が存在することが先行研究により指摘されており、その統語的具現形式は二つに大別される。一つは、英語と同様に名詞句内部に生起する二つの名詞の間に前置詞が介在する形式 (前置詞タイプ) であり、フランス語、イタリア語、スペイン語などの事例がこの形式を取る。これに対して、もう一つは、オランダ語、ドイツ語、ギリシャ語などの事例に見られる形式 (並置タイプ) で、この形式では、(14) のように N1 と N2 が前置詞の介在なしに並置される。

(14) een fles (*van) wijn 'a bottle (*of) wine'

本研究では、後者の事例としてオランダ語を取り上げ、これら二つのタイプが、形式上の違いにもかかわらず、総体としての句の解釈の他、N1の統語特性などの基本的な特性を共有することを示した上で、両者の統一的分析を提案する。両タイプの基本的な相違は、N1 と N2 の間に介在する前置詞の有無にあることから、言語間の差異はこの構文においても、形容詞的名詞構文の場合と同様に、構文特性としての統語特性に還元される。

さらに、(15) が示すように前置詞の有無に関わるこの通言語的な対比が英語の内部にも観察されることから、同構文の変異は、言語間、方言間の差異に関わらず、前置詞の有無に関する語彙指定の問題に還元される。

(15) She bought him a dozen (*of) daffodils.

本研究の分析によると、前置詞を欠く英語の擬似部分構造の事例は、単なる語彙的例外ではなく、予想される変異の一形態として捉えられる。

また、名詞は、格付与能力を欠くため、補部に直接名詞句を取ることはできず、前置詞句を選択する。

これに対して、数量詞は、その選択特性として前置詞を介在せずに名詞句を従え、この名詞句とともに一種の名詞的拡大投射を形成する。このように名詞句を補部とする選択特性は数量詞の統語特性であり、前置詞タイプと並置タイプの相違は、N1が補部選択において機能範疇の統語的性質を帯びるか否かの違いを反映している。

統語範疇について、名詞は語彙範疇であり、数量詞は機能範疇であることから、擬似部分構造においてN1が数量詞的特性を示すことは、この要素が機能範疇的性質を帯びていることを意味する。Lobeck (1991, 1995) の削除分析によると、削除の認可条件の一つとして、認可要素は一部の数量詞を含むある一定の類の機能範疇であることがあげられる。疑似部分構造のN1が(16)のように削除を認可することは、その機能範疇的性質を裏付ける。

(16) On the walls were head shots of a bunch of actors I didn't know and a couple I sort of did.

さらに本論では、擬似部分構文におけるN1の特性変化を文法化の観点から考察する。N1は、名詞と数量詞の中間的な性質を示す点で、主要範疇から非主要範疇への変化の中間段階に位置づけることが可能であり、この性質は、Hopper and Traugott (2003) が提案する文法化のクライン (17)、範疇性のクライン (18) に合致する変化を示している。

(17) content item > grammatical word > clitic > inflectional affix

(18) major category (> intermediate category) > minor category

前置詞タイプと並置タイプでは、補部選択における機能範疇的特性に関してN1の性質が異なることから、中間的特性を有する要素の間にも、(19)のようにさらに段階性を認めることが必要である。

(19) N > N1 in the preposition type > N1 in the juxtaposition type > Q

文法化との関連では、二つの異なる中間的範疇がどのように出現するかについても考察を行う。統語と意味との関係に対応とみなす立場では、意味的变化と統語的变化が相互に独立して進行する可能性が許容される。具体的には、疑似部分構造の文法化においては、数量詞への意味的变化が先行することにより、まず前置詞タイプのN1が出現し、その後、数量詞に対するある種の規範的対応関係に基づいて、前置詞タイプにみられる非規範的対応関係を解消する形で、補部選択に関して数量詞の統語特性を持つ並置タイプのN1が出現する可能性を提示する。このような形での中間的範疇の派生は、対応関係に基づき、語彙項目における統語と意味を相互に分離可能な素性の総体と見なすことにより可能である。これは言語の変化および変異に見られる言語の柔軟性を生成的アプローチの形式化に基づいて捉える可能性を示している。

第3章の補遺では、並置タイプの先行研究を概観する。具体的には、N1を数量詞とみなす分析 (Löbel (1989))、半語彙的範疇というあらたな統語範疇の概念を導入する分析 (van Riemsdijk (1998), Stavrou (2003))、述部移動分析 (Corver (1998)) を取り上げ、それぞれの問題点を指摘する。さらに、前置詞タイプと並置タイプの統一的な説明を与えることが可能な点で、本研究による分析が望ましいことを示す。

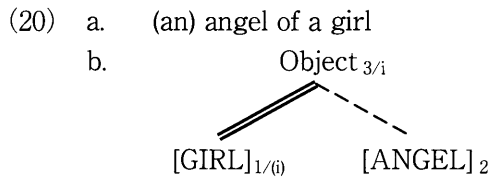
Chapter 4: Denominalizing Constructions (脱名詞化構文)

第4章では、形容詞的名詞構文と擬似部分構造において、本来的な名詞である N1 が非名詞的性質を帯びる点で共通性がみられることに注目し、N1 の特性変化を、指示性の喪失に基づく脱名詞化現象として統一的にとらえる分析を提案する。

まず議論の前提として、名詞の定義について、生成文法理論の従来統語範疇の規定と、その代案として示された Baker (2003) の提案を概観する。生成文法理論研究では1970年代の句構造研究以来、統語範疇は統語素性に基づいて定義されてきた。これに対して、Baker (2003) は語彙範疇を個別的な統語特性の帰結としてとらえることを提案しており、名詞は統語的指示指標を持つことにより指示的存在として定義される。

本研究では、Baker が主張するように指示性が名詞の規定要因であることは認めながらも、生成統語論の枠組みにおいて指示性を統語的にとらえる Baker の分析には理論的・経験的問題があることを指摘する。その上で、Jackendoff (1990, 2002) など提案されている意味層の理論に基づく指示性の概念を導入する。この概念意味論的分析では、意味内容は記述層と指示層とに分けて記述され、指示性は指示層における指示指標として捉えられる。本論では、同一性に関わる照応の説明において、この分析が指示性の統語的分析に対して優位であることを示した後、指示層における指示指標の取り扱いについて、修飾関係を含む名詞句における指示の同一性を適切に扱うために意味の形式化に関する修正を提案する。

本研究では、指示性に関するこれらの前提に基づき、形容詞的名詞構文および擬似部分構造における N1 の名詞性の喪失を、(20) のように構文特性として規定される指示指標の剥奪に基づいて分析することを提案する。



(20) では、アラビア数字は記述内容を、ローマ数字は指示指標を表す。N1 の angel は剥奪により指示指標を欠いており、句全体に相当する Object は N2 の girl が持つ指示指標 i を継承する。

ここで、D は、N を選択することによりその指示指標を継承するとの仮定 (Baker (2003)) に従うと、主要部と非主要部の衝突は、この選択関係の破綻と修復の結果として説明される。通常の名詞句では、統語的に D1 は、N1 を選択し、N1 の指示指標を D1 が主要部となる句全体に継承することにより、句全体の指示的表現としての性質が保証される。これに対して、脱名詞化の事例においては、N1 が指示指標を失うため、統語上の選択関係に基づいて、D1 が N1 の指示指標を継承することができない。そこで、当該名詞句内部で、指示指標を持つ別の要素として N2 が、いわば N1 の代替として D1 に選択されることで、句全体の指示性が保証される。その結果、これらの脱名詞化構文においては、統語的補部選択とは異なる形で、意味上の選択関係が結ばれることとなる。

本来的に当該名詞句の主要部であった N1 は指示性を失う結果、意味的には名詞句の主要部として機能することはできないが、一種の最後の手段として、完全解釈の原理に従う形で、修飾要素として解釈されることにより、解釈上の破綻は回避される。

さらに、Langacker (1991) の擬似部分構造に対する洞察、およびこれに基づく Ike-uchi (2003) の

形容詞的名詞構文に対する洞察に従い、脱名詞化と、プロフィールの変化により N1 が物理的対象から量・特性とみなされることとの相関について論ずる。

並列モデルでは、構文は X⁰ より上位の句レベルの語彙項目として位置づけられることから、構文における脱名詞化は、名詞由来形容詞を派生する -ful のような X⁰ より下位の形態素レベルの語彙項目や、連辞文において述部名詞を規定する be のような X⁰ レベルの語彙項目により規定される脱名詞化と同様に、語彙特性として説明される。

また、数量詞が歴史的に形容詞から発達したとの見解に基づくと、脱名詞化による形容詞化は、(21) のように N1 が数量詞に至る過程の中間段階として位置づけられる。

(21) N > A > Q

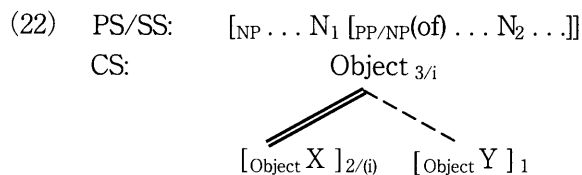
Chapter 5: Concluding Remarks (結語)

第5章では、第1章で示した課題および基本概念に関わり、本研究がもたらす帰結について考察する。

まず、形容詞的名詞構文と擬似部分構造にみられる意味的制約および統語と意味の非対応は、従来の統語分析では十分に捉えることができない。特に、意味層における指示指標の剥奪として説明される脱名詞化は、意味構造の精緻化により説明が可能となる現象であり、意味論および統語と意味の対応理論が説明すべき現象であることを示した。指示性の喪失は多くのイディオム表現で観察されており、イディオム化に関する今後の研究において、本研究の脱名詞化に関する提案は、説明の一般性の観点から、さらに精査されなければならない。

また、本研究は語彙項目の概念を句レベルにも拡張し、構文を独立した文法範疇として認める立場の妥当性を経験的に支持する。形容詞的名詞構文にみられる修飾の解釈、擬似部分構造にみられる数量化の解釈は、いずれも、構文に含まれる統語的構成素に還元することはできない。これらの解釈は構文を語彙項目の一種として認め、その構文の語彙特性に帰することによってのみ適切に捉えることが可能である。構文に帰すべき意味特性として規定される諸特性に対して、適切な統語的記述が得られない限りにおいて、本研究は構文を認める立場を支持する。

さらに、形容詞的名詞構文、擬似部分構造のそれぞれに見られる変異は、一方で脱名詞化という共通の特性を備えながら、他方では個別的な語彙指定によってのみとらえることが可能であり、相互には還元不可能な個別特性を示す。このことは、脱名詞化により統語的主要部が意味的に非主要部化される対応関係を規定する、より抽象化された (22) のような上位構文の存在を示唆する。



このような構文間ネットワークの可能性は、ある構文に対して下位構文が存在し、これらが全体としてクラインを構成するという構文を認める見解に合致する。

構文を認める見解における争点の一つとして、構文と意味との結びつきをどの程度認めるかという問題があげられる。本研究は、統語形式と意味との階層性の対応が保持されない主要部・非主要部の衝突を示す名詞句も、基本的には、この階層性の対応が保持される主要部・補部関係を示す名詞句と同じ句

構造を共有することを示している。これら二つのタイプの名詞句は基本的に異質の意味関係をコード化していることから、両者に共通する特性として、言語分析において有意とされる意味特性が示されない限りにおいて、本研究は、必ずしもすべての構文が意味を担うわけではないとの立場を支持する。

また、文法化に関わる本研究の帰結の一つとして、形容詞的名詞構文と擬似部分構文、およびそれぞれの変異形は、N1に関して、名詞が形容詞化を経て、数量詞化するに至る文法化のクライム (23) を構成する可能性を示すことがあげられる。

(23) N > A > N1 in the preposition type > N1 in the juxtaposition type > Q

近年の文法化研究においては、構文が、文法化が起こる文脈を形成するとの見解が示されている。これは、変化の対象となる要素が異なる範疇同士のいわば中間的性質を持つことから、いわばその不安定さが外部環境による支えを必要とすることの現れであり、構文が中間段階におけるそのような支えを提供する役割を担うと解釈することが可能である。この見解によると、文法化が一定程度進行し、変化の対象となる要素の中間的性質が薄れ、その不安定性が解消された段階で、構文による支えが不要となることが予測される。この予測は擬似部分構文に生起する一定の語連鎖が、独立した程度表現として、構文の文脈を離れて機能する次のような事例により裏付けられる。

(24) flowers of a sizable number

(25) Her eyes are a shade too small and a fraction too near together.

並列モデルにおいては、構文の概念を認めることで、このように言語変化の中間的特性を記述することが可能となり、変化を許容する柔軟なシステムとしての言語の側面が捉えられる。

このような「再範疇化」の現象は、統語範疇の性質についての示唆を与える。Culicover (1999) は、統語範疇は原理的に無限であるとの可能性を述べた上で、統語特性、形態特性、意味特性が言語獲得における範疇化の規準を与える可能性を示している。並列モデルの枠組みにおいては、統語範疇も、音韻構造、統語構造、概念構造の集合体として規定することが可能であり、これに基づき、ある一定の語彙項目における対応が Culicover のいう範疇化の規準として機能するとの可能性が開かれる。

最後に、統語論の役割に対する再検証としての側面について、本研究では、構文を認める見解をとり、統語論の簡素化の仮説に従う形で、脱名詞化構文の諸特性は、統語構造の精密化や不可視移動を導入することなく説明が可能であること、またこの構文の変異をとらえる際に、統語特性に関する指定が不可欠であることを論じた。これらのことから、言語分析において、統語論は、依然として重要な役割を果たす一方で、その説明の対象は従来の統語的分析に比して縮減されることを示した。

論文審査結果の要旨

本論文の目的は、文法の並列モデルに基づき、構文を文法の基本概念の一つとして認める立場から、英語の形容詞的名詞構文と擬似部分構文に観察される統語的主要部名詞の脱名詞化現象のメカニズムを解明することにある。各章の概要は以下の通りである。

第1章では、本論文で用いられる指針と理論的枠組みが提示される。まず、言語分析における統語論

の役割について Culicover and Jackendoff (2005) の (1) が指針として採用される。

(1) 最も説明力のある統語理論は、音声と意味を仲介する際に必要最小限の構造を仮定する。

また、音韻部門、統語部門、意味部門は自律的生成機構であり、各部門で形成される音韻構造、統語構造、概念構造は対応規則により結びつけられる並列モデルの枠組みが採用される。さらに、構文を独立した文法概念として認める見解が採用され、句レベルの表現も含む語彙項目は、3つの構造の相互関係の合法性を語彙認可により照合するものと考えられる。

第2章では、形容詞的名詞構文が分析される。an angel of a girlのような表現は、形式上は angel が主要部であるが、意味上は girl が主要部であり、an angelic girl に対応する解釈をもち、名詞である angel が脱名詞化され、形容詞化されている。この現象に対する既存の統語的分析の問題点を指摘し、[Det1 N1 [of Det2 N2]] の部分が句レベルの項目すなわち構文であり、名詞句の統語構造をもちながら、N1 が N2 に対する修飾語句となる概念構造をもつ分析が最も妥当性が高いことが示され、英語の方言間や言語間の変異にも妥当な説明が与えられることが示されている。

第3章では、擬似部分構造が分析される。a bunch of menのような表現は、形式上の主要部は bunch であるが、意味上は men が主要部となる。ここでは、名詞である bunch が脱名詞化を受け数量表現化されている。既存の統語的分析がいずれも妥当性を欠くことが示され、[(Det) N [of NP]] の部分が句レベルの項目であり、概念構造において N が NP に対する数量表現となる分析が提示され、その妥当性がこの表現の言語間の変異等の分析を通して示されている。

第4章では、上記二つの構文に共通する脱名詞化現象の根底要因は、形式上の主要部名詞が、名詞が本来有している指示性を消失することであると主張される。この仮説により、二つの構文の文法化プロセスにおける位置づけが捉えられることが示されている。

第5章では、第1章で示した枠組みに基づく本論文の研究が、今後の言語研究にもたらす理論的帰結が論じられており、統語論と意味論の役割分担のあるべき姿が示唆されている。

以上のように、本論文は英語の二つの構文の詳細な研究により実証的英語研究に貢献すると共に、統語論と意味論の位置づけに関する考察によって言語理論研究に大きく貢献している。

よって、本論文の提出者は、博士（文学）の学位を授与されるに十分な資格を有するものと認められる。